

令和3年7月15日（木）中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会  
議題（1）についての意見

京都大学大学院教育学研究科准教授 石井英真

学校カリキュラムの全体で教科等横断的な学習の展開を進めていくことは、①教科・科目や領域ごとにタコつぼ化しがちな学習経験を教科等横断的に統合して、人間的成長につながる学びを展望するという観点から、また、②スクール・ミッション等で明確化されたそれぞれの学校で目指す児童・生徒像を、教職員がチームとして実現していく取り組みを促すという観点から重要である。その際、たとえば、①AIの進歩についても、技術革新とその実装の問題であるとともに、それが生み出す社会変動を見通し対応したり、人間性について考え直したりする課題も投げかけていることに鑑みて、文理を超えた学びを促すという点で、また、②総合的な学習（探究）の時間や課題研究等の学びの変革が、そこだけに閉じがちな状況に対して、学校生活の大部分を構成する教科の学習の改善につなげるという点でも、さらに、③特に中等教育段階において、社会参画につながる学び、特に Society 5.0 と形容されるような社会変動のリアルを経験し、キャリアイメージを広げる点でも、「STEAM教育」はカリキュラムに横串を通す一つの切り口にはなるであろう。そして、STEAMの「A」を広く人文学的な意味で捉えていることは、すべての生徒たちに必要な教育、教育の公共性の観点から、科学と（人文学的）教養、専門教育と一般教育の間の統合をめざしてきた、中等教育の歴史的な展開や近年の諸外国の先進的な取り組みの特徴に照らしてみても妥当である。

「STEAM教育」が、上記のような取り組みを促す象徴的な政策アイデアとしての意味を持つとしても、それをカリキュラム編成のどのレイヤーに位置づけるのかといった点が現時点では明確ではない。それは、総合的な学習（探究）の時間や課題研究といった既存のカリキュラム上の領域や取り組みに対して、ESDやSDGs等の概念と同様に、その実践の方向性を示唆する理念的なものなのか、逆に、「〇〇教育」という主題や手法の提案に相当するものなのか、あるいは、「社会に関わった教育課程」やカリキュラム・マネジメントといった、新学習指導要領のカリキュラム編成の原理に関わる鍵概念を再構築するものであるのか、総合的な学習（探究）の時間等のカリキュラムの領域を再編するものであるのか。こうしたカリキュラム編成上の位置づけが明確でなければ、学習評価の指針も組み立てられないし、政策評価（施策の検証）としてのカリキュラム評価の枠組みや手立ても明確にならない。

STEAM教育に限らず、教科等横断的な学習のデザインや「探究的な学び」の充実が目指されるところであるし、特に、高等学校の課題研究等において、高大連携、企業連携、国際交流といった個別の側面について、探究的な学びを支援する、さまざまなPBLのプログラムも充実してきている。ただ、一つ一つのプログラムをイベント的に提供するだけでは、探究が深まっていけないし、最初は目新しくて食いつく生徒たちも慣れてくるとモチベーションを維持できないという点に留意が必要である。点のプロジェクトを線のストーリーとして深めていくような、学びの履歴に寄り添い、その視野の外部を指さしたり、学校の外のさまざまなホンモノとつなげたりしながら、生徒の学びからカリキュラムを紡いでいく、伴走者的な教師の指導性が重要となる。プログラムの束ではない、問いや視野や認識の深まりと

しての学びのカリキュラムを、学校外のリソースも生かしながら、生徒たちとデザインする、カリキュラム・メーカーとしての教職員集団の力量形成に対する支援をおろそかにしてはいけないうらう。

また、高等学校での総合的な学習（探究）の時間等の取り組みについては、大学等の専門機関との連携による専門研究活動、あるいは、地元企業等との連携による地域創生活動に二極化している状況も見られる。その結果、SSH等の指定もなく専門研究的な学びを支援するリソースが不十分で、他方で、地元の見えやすい資源も発見しづらいう校においては、探究的な学びのイメージを形成しづらいう部分もある。STEAM教育という切り口が、二極化をさらに進める方向性で機能するのか、あるいは、高校のカリキュラムの特色化のバリエーションや創意工夫を広げる方向性で機能するかという点を考慮しながら、探究的な学びや教科等横断的な学びの促進に向けた制度設計を考えていく必要がある。

高校の新学習指導要領において、各教科・科目においても、「探究」という言葉が用いられることで、「探究」概念の意味が拡散しているように思われる。学習指導要領改訂の流れを見れば、教科における習得的な学びと総合における探究的な学びの相互還流の構造があり、「習得」「探究」の間に、教科における「活用」を位置づけるという形で展開してきた。総合的な探究の時間等における「探究」については、問いや主題についての認識を深めたり、社会と関わる協働的な問題解決の経験から自らの生き方や在り方を見つめ直したりすることが目指されるが、実際には、探究サイクルを回すこと自体が目的化して形式化する傾向もみられる。「探究」概念のもともとの意味やその実践レベルにおける取組の実態を再点検し、「探究」概念の射程や、用語の整理を行うことも必要である。